

なぜ『資本論』は『大論理学』のように見えるのか？

川崎 誠

イ・イ・カウフマンは、『資本論』初版へのその書評がマルクスによって絶賛されたロシアの経済学者である（『資本論』第二版「後書き」）。彼はその書評のなかで、「一見したところ、叙述の外的形式から判断すれば、マルクスは最大の観念論哲学者であり、しかも、このドイツ的な意味で、すなわち悪い意味で、そうなのである」と述べた（同）。ここで「ドイツ的な意味で、すなわち悪い意味で」とは、「神秘化されたヘーゲル弁証法の意味で」の謂である⁽¹⁾。

『資本論』とヘーゲル弁証法との連関については、マルクス自身にも言及するところがある：「この〔研究の〕仕事を仕上げてのちに、はじめて、現実の運動をそれにふさわしく叙述することができる。これが成功して、素材の生命が観念的に反映されれば、〔叙述は〕まるである"先験的な"構成とかかわりあっているかのように、思われるかもしれない。」（第二版「後書き」） 「ある"先験的な"構成」とはもちろんヘーゲル『大論理学』を指している。

このように、優れた読手と著者自身とが口を揃えて「『資本論』は『大論理学』のように見える」と言っている。とりわけ著者自らそう言うからには、読者の側も「『資本論』を『大論理学』のように読む」のでなければなるまい。少なくとも、そのように読まれることを期待して『資本論』は書かれたのである。ではどのように読めば『資本論』は『大論理学』のように見えるのか。

一 形而上学から論理学へ

ヘーゲルは哲学史においてカントの占める位置を次のように説いた（『大論理学』初版「論理学 その一般的区分について」）。

カントの哲学は近代哲学の基礎と出発点をなす。(2)

つまりカントにおいて哲学は一つの終焉を迎えている。ヘーゲルはこれを「形而上学の崩壊」(WdL I S.216)と呼んだ。すなわち、

悟性は経験をこえ出てはならない、こえ出るならば認識能力は理論性になってしまうが、これはそれだけでは妄想以外の何ものをも産まない。(初版「序言」)

というカント哲学の公教的な学説によって、「前に形而上学とよばれていたものは、いわば根こそぎにされてしまい、学問の系列からその姿を消してしまっている」(同)、ヘーゲルはこう見立てた。そしてかかる状況のもとで、カント自身は「論理的なもの **das Logische** のより規定された重要な諸側面により詳細にたち入った」(第二版「論理学の一般的区分」)のである。なぜなら、「論理は人間にとって自然的なもので、むしろ人間固有の本性そのものである」(第二版「序言」)から、妄想に陥らずに学を営むにはそれを欠かすことはできないのである(3)。

しかしそれにもかかわらず — とヘーゲルは説く —、「[カント]後の哲学の叙述は論理的なものにあまり留意しておらず、しばしばこれに対して粗野な軽蔑しか示さないものもあった — そしてそのゆえに報復を受けずにはいられなかった」(第二版「論理学の一般的区分」)のである。だからヘーゲル自らは「新しい試み」を、すなわち「思想の王国を哲学的に、すなわちその固有の内在的活動性において、あるいはその必然的な展開において叙述する」(第二版「序言」)ことを、「一からやり直した」のである。そしてその際ヘーゲルは、諸対象の最も奥なる普遍的なものの「リズム」、すなわち諸対象の「内容がそれ自身に備えている弁証法」(第二版「論理学の一般的概念」)を学の方法として把握した。というのは、弁証法の運動こそは「認識の絶対的な方法であると同時に内容そのものの内在している魂」だからである(初版「序言」)。そうであれば、「この方法の進行に従わず、その簡明なリズムに乗らない叙述は学問的と見なされえないことは明らか」(第二版「論理学の一般的概念」)であ

なぜ『資本論』は『大論理学』のように見えるのか？

る。ヘーゲルの主著がいわゆる『大論理学』、すなわち『論理の学 Wissenschaft der Logik』であるのはこのためである。

そして自らを「ヘーゲルの弟子」と称したマルクスも、当然ながらヘーゲル弁証法を継承する。そもそも「素材の生命を観念的に反映した」（再掲）叙述とは、「[認識された] 内容そのものの内在している魂」を叙していると言っ
てよい。さればこそ次のような評もなされる。

弁証法がヘーゲルの手のなかでこうむっている神秘化は、彼が弁証法の一般的な運動諸形態をはじめて包括的で意識的な仕方で叙述したとい
うことを、決して妨げるものではない。（『資本論』第二版「後書き」）

そして自らの方法の弁証法であることは次のように説かれる。

この筆者 [カウフマン] は、私の現実的方法と彼が名づけるものを、こ
のように的確に描き、その方法の私個人による適用に関する限り、この
ように好意的に描いているのであるが、こうして彼の描いたものは、弁
証法的方法以外の何であろうか？（同）

そうであれば、「『資本論』が『大論理学』のように見える」ためには、や
はり — つまりカウフマンがそうしたように — 『資本論』の弁証法的方法が把
握されねばならない。

二 類比的同一性

さて、 $A \cdot B$ 二つのものがあり「 B は A のように見える」というからには、それは端的に「 B は A である」と言うことと区別される。「 B 」が「 A のよう
に見える B 」であることが言われるのだから $A \cdot B$ の同一性にはちがいない
が、それは直接的・無媒介的な同一性ではない。では「 B は A のように見え
る」とき、両者はいかなる関係にあるのか。

参考となる叙述をウィトゲンシュタインが遺している。この哲学者もまた「論理的なもの」を生涯探究しつづけたのだから、先入見に捉われずまずはその説くところを参照しよう。「ノルウェーで G.E. ムーアに対して口述されたノート」の一節である。

<ムーア 112a⁽⁴⁾> 論理的命題の効用。非常に複雑な命題で、それを見ただけでは同語反復であることが分からないような命題もあろう；しかしその命題は、諸々の同語反復を構成するためのわれわれの規則に従って、或る他の命題から一定の操作で導出されうることが示される；したがって一つのことが他のことから帰結するということを、他の仕方では見てとることができないときにも、この仕方で見えてとることができる。例えば、同語反復が $p \supset q$ という形式のものなら、 q が p から帰結することを見ることができ；等々。

まず「論理的命題 logical propositions ; logische Sätze」だが、これについてはヘーゲルも同じく「論理的命題は同語反復である」と説いていることが注目される。『大論理学』第二版の「論理学の一般的概念」である。

学的前進を獲得するために必要な唯一のことは、否定的なものはまた同じく肯定的であるという、換言すれば、自己矛盾しているものは自己を解消してゼロに・すなわち抽象的な無になるのではなくて、本質的にはその特殊な内容の否定になるにすぎないのだという、あるいはまた、そのような否定は全面的な否定ではなくて、自己を解消する一定の事柄の否定であり、それゆえに規定された否定であるという、したがってまた、成果のうちには本質的に成果がそこから出てくる当のものが含まれているという論理的命題を認識することである；——このことは元来一つの同語反復である、というわけは、もしも上述のようでなければ、成果とよばれているものは直接的なものであって、成果ではないであろうからである。成果を生みだすもの・すなわち否定は規定された否定であるからして、否定は一つの内容をもつのである。否定は、一つの新しい

概念であるが、しかしそれは〔否定される以前の〕先行する概念よりもより高い・より豊かな概念である；というわけは、前述の否定は、その先行する概念を否定したその分だけ、換言すれば、〔先行する概念に〕対立しているものの分だけより豊かになっているのであるから。したがってそれは、先行する概念を含んでいるが、しかし先行する概念より以上のものを含んでおり、かくして先行する概念とこれに対立しているものとの統一なのである。

「成果のうちには本質的に成果がそこから出てくる当のものが含まれている」、これはウイトゲンシュタインの説く「同語反復が $p \supset q$ という形式のものなら、 q が p から帰結することを見てとることができる」と同一である——「 q が p から帰結する q follows from p 」とき「 q : 成果」・「 p : 成果がそこから出てくる当のもの」である。そしてそれはいま「 $p \supset q$ 」（真理関数・すなわち「[そのように] 規定された否定）」という「同語反復の形式」である。つまり「 p は p である」において、「 p である p 」（成果）が「 p 」（成果がそこから出てくる当のもの）から区別され、ゆえに「 p は q である」。こうした「 p は p である」は空虚でなく、「同語反復が $p \supset q$ という形式のものなら、 q が p から出てくる」ことは「本質的」である——。つまりウイトゲンシュタインとヘーゲルと、両者の説く「論理的命題」に径庭はない。そしてヘーゲルがあれやこれや繰り返し説いているように、要するに「論理的命題」とは、そこにおいて「論理的なもの」（弁証法）の叙される命題である。

このように「論理的命題は同語反復である」のだが、その「成果」は「先行する概念よりもより高い・より豊かな概念である」。すると「 B は A のように見える」は「論理的命題」である。というのは、それは同語反復「 A は A である」の成果「 A である A 」が実は「 B である A 」（ A のように見える B ）であることを言っており、このとき「 A のように見える B 」は「先行する A 」よりも「より高く・より豊か」だからである。

この「 B は A のように見える」についてより具体的なイメージをもつべく、ここで言語事実を参照しておこう。類推的創造 *la création analogique* である。現代ドイツ語で *Gast* の複数は *Gäste*、*Hand* の複数は *Hände* である。

これらはかつて別の形態であった複数が、音韻変化を経て現形になったものである。ソシュール『一般言語学講義』——以下『講義』と略——は次のように説明する。

<講義> 古代高地ドイツ語では、*gast*「客」の複数は最初 *gasti*であった、*hant*「手」のそれは *hanti*であった、等々。後になって、この *-i* がウムラウトを生じた、つまり先行音節の *a* を *e* にかえる結果をきたした：*gasti* → *gesti*、*hanti* → *henti*。次いでこの *-i* がその音色を失い、*gesti* → *geste*、*etc.* となった。その結果、今日われわれは *Gast* : *Gäste*、*Hand* : *Hände* などの語をもち、或る種類の語はすべて同様の単数・複数の別を示している。(p.117)

音韻変化の「結果は、問題の音韻が現われるすべての語をおしなべて変遷せしめる」(p.202) から、複数形が一方で *Gäste* になりながら他方で *Hanti* のままであるということはない。両語とも「一つの種類 *une classe*」に属し、曲用「 $\bigcirc a \Delta$: $\bigcirc \ddot{a} \Delta e$ 」は一義的に同一である。

これに対して、ドイツ語では *Kranz* ($\bigcirc a \Delta$) の複数も *Kränze* ($\bigcirc \ddot{a} \Delta e$) である。ただしこの複数は類推形であって音韻変化の結果ではない——なお「類推は音韻変化とともに諸言語の進化の一大要因である」(p.227) ——。『講義』に曰く、

<講義> ドイツ語では、*Gast* : *Gäste*、*Balg* : *Bälge*、*etc.* は音韻論的であるが、*Kranz* : *Kränze* (古くは *kranz* : *kranza*)、*Hals* : *Hälse* (古くは *halsa*)、*etc.* のほうは模倣による。(p.226)

Kränze が形成される比例四項式は

$$\begin{aligned} \text{Gast} : \text{Gäste} &= \text{Kranz} : x \\ \therefore x &= \text{Kränze} \end{aligned}$$

だが、類推に関しては音韻変化と異なる次の事情が指摘される。

<講義> 類推は規則性を助成し、形成法や屈折の手順を統一しようとする。しかし類推もむら気だ：*Kranz*：*Kränze*, etc.とあるかと思うと、*Tag*：*Tage*, *Salz*：*Salze*, etc.とある、これらは相当の理由で類推に逆らったものである。それゆえ、或るモデルの模倣がどこまで広がるか、またそれをうながすべく定められた型がどれであるかは、前もっていうことはできないのである。(p.226)

現代ドイツ語ではなるほど *Hand*・*Gast*・*Kranz* 三語の曲用はいずれも「 $\text{Oa}\Delta$ ： $\text{O}\ddot{\text{a}}\Delta\text{e}$ 」で表わされる。けれどもかつての曲用 *Hand*：*Handi*・*Gast*：*Gasti* と *Kranz*：*Kranza* の差異が示すように、前二者の曲用の同一性が一義的であるのに対し、それらと後者の同一性は類推的である。*Kränze* を類推形と呼ぶゆえんだが、ともあれ *Hand* と *Gast* が「類 *Gattung* ; *genre*」を同じくする一方、*Gast* と *Kranz* とは異類なのである⁽⁵⁾ — '*genre*'は'*classe*'の類語 —。以上を「同語反復」にかかわって言えば、*Hand*：*Hände* と *Gast*：*Gäste* の同一性・すなわち「 $\text{Oa}\Delta$ ： $\text{O}\ddot{\text{a}}\Delta\text{e}$ は $\text{Oa}\Delta$ ： $\text{O}\ddot{\text{a}}\Delta\text{e}$ である」は「空虚な同語反復の表現以上のものではない」(WdL II S.41) が、*Gast*：*Gäste* と *Kranz*：*Kränze* の「同一性は自己自身への反省であり、この反省は内的なつきはなす運動としてのみ自己自身への反省である」(op.cit. S.40)。「自己自身への反省」が「内的なつきはなす運動」なのだから「自己から自己をつきはなす運動」だが、そうした運動を経て得られた「成果」は確かに「先行する概念よりもより高い・より豊かな概念である」。例に即して言えば、いまや「 $\text{Oa}\Delta$ ： $\text{O}\ddot{\text{a}}\Delta\text{e}$ 」の曲用は *Hand*：*Hände*・*Gast*：*Gäste* のみならず、*Kranz*：*Kränze* にも妥当する。つまり「*Kränze* は *Gäste* のように見える」は類比的同一を説く「論理的命題」である。

三 類比的同一と知

さて上には、カント以後の哲学におけるヘーゲルの「新しい試み *ein neues Unternehmen*」について触れた。同じ「新しい試み」を説く叙述が『講義』にも見出される。

〈講義〉 言語のなかに入るものは、一として言のなかで試みられなかったものはない;そして進化現象はすべてその根源を個人の区域にもつ。この原理は……かくべつ類推的改新に適用される。*Kränze* が *Kranza* に取って替わりうる競争者となる前には、最初の話手がこれをその場で作り、他人がこれを模倣し、反復し、ついにこれを慣用せざるをえなくすることが、必要であった。／すべての類推的改新が、そのような幸運にありつくわけでは、なかなかない。おそらく言語の採り上げまい明日の日知らぬ結合には、ふんだんに出あう。(p.235。例は変えてある)

「言語 *langue* のなかに入るものは「新しいもの」だが、それは「言 *parole* のなかで試みられる」。つまり「新しい試み *un essai nouveau*」である。

「言のなかで試みる」のだから、「試み」は「その根源を個人の区域にもつ」。すると *Kranz* の曲用が *Kranz* : *Kränze* になったのも運次第・偶然にすぎない。そこで或る子供が *Tag* の複数を *Täge* としたとしよう。比例四項式は「*Gast* : *Gäste* = *Tag* : *x* ∴ *x* = *Täge*」である。するとこの場合も、*Tag* : *Täge* は *Gast* : *Gäste* と類比的に同一なのか。類推は「むら気 *caprice*」なのだから、*Tag* : *Täge* の試みは *Kranz* : *Kränze* と区別されないように思われる。

しかしそうではない。*Kranz* : *Kränze* に認められた *Gast* : *Gäste* との類比的同一性は、*Tag* : *Täge* にはそもそも認められない。ここでもウィトゲンシュタインの説くところを参照しよう。『論理哲学論考』 — 以下『論考』と略 — である。

〈論考 3-33〉 論理的構文論においては、記号の意味は何ら役割を果

なぜ『資本論』は『大論理学』のように見えるのか？

たしてはならない；論理的構文論は記号の意味が問題になることなく立てられねばならず、諸表現の記述だけを前提しうる。

「論理的構文論 *logische Syntax*」は論理的命題（論理的文）の構文論である。「構文論において、記号の意味は何ら役割を果たしてはならない」という主張そのものは珍しいものではない。例えば国語の構文論では「桜の花が咲く。」と「桜の花が散る。」という意味の上での真逆が同一構文として記述されるが、これは構文の記述において「咲く」や「散る」の意味が捨象されるからである（渡辺実『国語構文論』⁽⁶⁾）。

『論考』3-33に戻れば、「意味 *Bedeutung*」は周知のようにフレーゲに由来する。「固有名の意味は、その名前が表示ないし名指す対象である」（『フレーゲ著作集4』p.103）というのがそれであり、例えば記号「明けの明星」・「宵の明星」の「意味」はともに「太陽から二番目の惑星」である。けれどもフレーゲによれば、「われわれが、『宵の明星はその公転周期が地球のそれより小さい惑星である』と言う場合、われわれは『明けの明星はその公転周期が地球のそれより小さい惑星である』という文におけるのは別の思想を表現した」（同 p.26）のである。その理由は、「明けの明星が宵の明星だということを知らない人は、一方を真としながら、他方を偽と見なすことがありうるから」（同）である⁽⁷⁾。

では論理的構文論において「記号の意味が役割を果たす」とすればどうなるか。その場合フレーゲの代入則が成り立ち、「公転周期」に関する上の二つの文は「金星はその公転周期が地球のそれより小さい惑星である」という同一文である。それにもかかわらず、彼の人が「一方を真としながら、他方を偽と見なす」なら、これは二つの文の同一に矛盾する。そこで「記号の意味は何ら役割を果たしてはならない」とされるのである。ここでの問題が彼の人の無知にあることは言うまでもない。しかしいかなる「知」が必要とされるのか、あらかじめ決まっているわけではない。「知」を条件とするなら、そのことを組み込んで構文を説かねばならないだろう。

そして実は、学はずで「知」を組み込んでいる。子供が *Täge* を発したとたん、親や教師といった世人がその誤りを指摘する。その結果 *Täge* は「言

語の採り上げまい明日の日知らぬ結合」として忘れられ、それは「模倣・反復・慣用」を経て辞書に記載される *Kranz: Kränze* と同列ではない。『論考』が続けて説くのはこのことである。

<論考 3・34> 命題は本質的な、また偶然的な諸特徴をもつ。

偶然的なのは、命題記号生産の特定仕方からくる特徴である。本質的なのは、命題をしてその意義を表現できるようにする、その特徴だけである。

例えば *Kränze* を生産する特定仕方・すなわちそれが或る人の「言のなかで試みられた」ことは「偶然的な特徴」である。しかし類推形 *Kränze* はいまや「言語のなかに入り」（再掲）・換言して「社会〔言語共同体〕によって受け入れられ、言語事実となった」（p.137）。だから「命題はその意義 Sinn を表現できる」のである。つまり「模倣」や「反復」を経ての「慣用」は「本質的な特徴」である。これに対して、人が *Täge* にこの本質的な特徴を認めることはない。

このように、「*Kränze* は *Gäste* のように見える」、これは現代ドイツ語での「知」である。では『資本論』は『大論理学』のように見える」というとき、それはいかなる「知」に支えられているのか。『資本論』に次の一節がある（初版「前書き」）。

価値形態に関する部分を別とすれば、本書を難解だと言って非難することはできないであろう。もちろん私は、新しいものを学ぼうとし、したがってまた自分自身で考えようとする読者を想定している。

『資本論』が「新しいもの *etwas Neues*」であることは言うまでもない。そして「新しいもの」は一般に「難解」であろう。ところがマルクスは『資本論』は「難解ではない」と言う。なぜか。「新たなものを学ぼうとする」読者は、「したがってまた *also auch* 自分自身で考えようとする読者」である—— '*also auch*'は'*also doch*'の反対で、「当然」のニュアンスをもつ——。そして「論

なぜ『資本論』は『大論理学』のように見えるのか？

理の学」は「思考の学 *die Wissenschaft des Denkens*」(『エンチクロペディー』 § 19) と言われる。つまり「考える *denken*」とは「論理的に考える」のである。その「論理」は「人間にとって自然的なもの」・「人間固有の本性そのもの」(再掲)であった。そうした人間に固有のもの *Eigentümliches* の難解であろうはずがない⁽⁸⁾ ⁽⁹⁾、また人間にとって自然的なものは社会によって受け入れられよう。なるほど上述したように、カント以後の哲学は論理的なものに留意しなかったし、ヘーゲルもまた「死んだ犬」として扱われた。そうした状況のもとでは、「論理的に考えること」それ自体が「新しいものを学ぶ」ことであり、だからそのことをマルクスはが読者に求めた。しかしそうした自分の要求が社会によって応えられることをマルクスは確信していたはずである。なぜなら、論理的・弁証法的に考えることこそ人間固有の「知」なのだから。

四 論理の歩み

「『資本論』は『大論理学』のように見える」か否か、そのことを『資本論』読者が判断できるとすれば、その人は『大論理学』に精通しているはずである。ではその『大論理学』・すなわち『論理の学』において弁証法はどのように叙されているか、実例を見ておこう — 同じヘーゲルの著作でも、いわゆる『小論理学』は口頭での補遺を前提しており、論理が展開する叙述としては不全である —。採り上げるのは本質論「反省規定章」の一節である。

[例] 定立された存在はまだ反省規定ではない、それは否定一般として規定態にすぎない。しかし定立する運動はいまや外的反省との統一のうちにある；外的反省はこの統一において絶対的な前提する運動である、すなわち、反省の自己自身からつきはなす運動・あるいは反省そのものとしての規定態を定立する運動である。定立された存在はだからして定立された存在そのものとしては否定である；しかし[外的反省によって] 前提された定立された存在としてはこの否定は自己へと反省した否

定としてある。こうして定立された存在は反省規定である。

冒頭に「定立された存在はまだ反省規定ではない」とあるのが、わずか六個の文を経て「定立された存在は反省規定である」と叙される。一見矛盾するこうした叙述が許されるのは、経過する複数の文においてヘーゲルの思考が進展し、それが「一歩ずつ進むヘーゲルの叙述」（寺沢恒信）⁽¹⁰⁾ に表現されたからである。複数の文を連ねることで思考が展開するのだから「連文的推論」だが、これこそは勝義の論理にはほかならない。論理とは語的概念から文的判断へ、さらに文的判断から連文的推論へと展開・充実するのだからである（森重敏『日本文法通論』）。

なるほど上に引いた「連文的推論」に対しては、「要するに『いまや nun』とは、第一小節から第二小節へ移ったことをさす以上の意味をもっていないのであって、「このような展開が論理的展開であるとは認めがたい」（寺沢恒信。以文社版『大論理学』2 p.298 訳者注 63）、という批判もありうる。けれどもその当否は別に仕かかる批判そのものは、ヘーゲルのものした連文が「論理的展開」として充分でないという指摘であり、だから批判者が要求していることも、「定立された存在がどのようにして反省規定になった」のか、それを推論する思考過程がそこにおいて十全に伝わる文の連なりである。叙述すなわち連文的推論において論理が展開されるということは動かないのであり、これは「論理学」が「思考の学」（再掲）とされるゆえんでもある⁽¹¹⁾。

『大論理学』が「一歩ずつ進む」からには、その『大論理学』のように見える『資本論』もまた、その叙述は「一歩ずつ進む」であろう。さもなければ、『資本論』が「まるである"先験的な"構成とかかわりあっているかのよう」であり、著者のマルクスが「悪い意味で」・「神秘化されたヘーゲル弁証法の意味で」観念論哲学者に見えることはありえない。二つのテキストの叙述がともに「弁証法の簡明なリズムに乗っている」（再掲）からこそ、『資本論』は『大論理学』のように見える」。その刻むリズムにおいて『資本論』と『大論理学』とは一対一に対応しているのである。

なるほどマルクスは弁証法について、

なぜ『資本論』は『大論理学』のように見えるのか？

弁証法は、現存するものの肯定的理解のうちに、同時にまた、その否定、その必然的没落の理解をふくみ、どの生成した形態をも運動の流れのなかで、したがってまたその経過的な側面からとらえ、なにものによっても威圧されることなく、その本質上批判的であり革命的である。(第二版「後書き」)

と説いている。しかしこれはマルクスによる弁証法の要約的説明であって、それ自体が弁証法なのではない。そもそもこの説明は、ヘーゲルによる

悟性は規定し、これらの規定を固執する；理性は、悟性の諸規定を無へと解消するものであるから、否定的かつ弁証法的であり、また普遍的なものを産出し、特殊的なものをそのもとに包摂するものであるから、肯定的である。(初版「序言」)

という弁証法把握と基本的に変わらない——「どの生成した形態：悟性の諸規定・特殊なもの」、「運動の流れ：解消し、産出し、包摂する [運動の流れ]」、「なにものによっても威圧されない：特殊なものをそのもとに包摂するところの普遍的なもの [なので、なにものによっても威圧されない]」等の対応——。だがこのように要約的に描かれた弁証法であれば、『大論理学』のすべての叙述に妥当する。だから仮にこうした要約で弁証法が済むのであれば、「一歩ずつ進む」論理を辿らなくとも『大論理学』は読み解くことができよう。

『資本論』についても同じである。『資本論』の論理を読むとはマルクスを追思考することである。そうであれば、著者の思考を伝える連文のどの一文であろうと、読者が恣意的に読み飛ばすことは許されない。叙された一文一文がマルクスの思考過程を読者に伝えているからである⁽¹²⁾。

五 類比的同一と模倣

『資本論』と『大論理学』がその論理において類比的に同一であるなら、

次の問いは不可避だろう。すなわち、「『資本論』の論理は『大論理学』のその模倣なのか」、これである。そしてたとえおおかたの強い反発は予想されても、答えはその通り、論理の上で『資本論』は『大論理学』を模倣している。

「模倣」と言えばマイナスのニュアンスは拭えない。しかし早計は禁物である。例えば *Kränze* の最初の「試み」が「言語のなかに入る」ためには・換言して言語共同体の「知」となるためには、「他人がこれを模倣し、反復する」ことが必要であった。論理に関しても別のことはない。『大論理学』に叙される弁証法はヘーゲルの「新しい試み」であった。それは「逆立ちしている」（『資本論』第二版「後書き」）とは言え、「神秘的な外皮のなかの合理的な核心」（同）においては「批判的であり革命的である」（同）。一言で言えば「偉大な思想」（同）である。だがいかに偉大であれ、「他人がこれを模倣し、反復する」ことがなければそれは「明日の日知らぬ」試みに終わる。弁証法が「社会によって受け入れられる」ことはないのである。

そしてマルクス自身、自らの「模倣」を認めていると思われる。既述のように、マルクスはカウフマン評に関わって「その方法の私個人による適用」（再掲）と述べていた。この「適用 *Anwendung*」は、無論ヘーゲルが功績として遺した弁証法のその「適用」である。また同じ第二版「後書き」には

価値理論に関する章のあちこちで、彼 [ヘーゲル] に固有な表現様式に媚を呈しさせた。

とある。「媚を呈する *kokettieren*」とは「他人に気に入られるような態度をとる」（『日本国語大辞典』）ことだが、ヘーゲル亡き後当人に気に入られる必要はないのだから、ここでは「深く納得し、心酔している」の謂だろう。つまりマルクスはそれほどまでにヘーゲルの「新しい試み」に傾倒し、自らその「弟子」としてこれを継承したのである。そうした師弟関係を見誤っては、『資本論』の論理を読者が理解することはないだろう。

繰り返し述べるが、こうしたマルクスの「模倣」——私見によれば、さらにソシュールやウィトゲンシュタインによる「反復」——があつてはじめて、ヘーゲ

ル弁証法は「明日の日知らぬ」試みに終わることを免れた。マルクスがヘーゲル論理を「模倣」したと聞き、『資本論』への冒涇だと憤るのは単純に過ぎる。むしろヘーゲルが思考し・叙した「試み」——すなわち『大論理学』の「論理」——とマルクスによるその「模倣」が相俟って、弁証法は「慣用」(真理)にまで達しうる、そのように考えるべきなのである^{(13) (14)}。

注

- (1) 詳細は拙稿『『資本論』の論理をどう把握するか』に説いた。
- (2) 『大論理学』第二版は「近代ドイツ哲学の基礎と出発点をなす」とする。
- (3) ただし言うまでもないが、ヘーゲルはカントへの批判も遺している：「[カントによる悟性の諸形式の] 批判は、客観的思惟の諸形式をただ物から遠ざけただけであり、それらを見出した通りに主観のうちに置き去りにした。すなわち、批判は、その際、これらの形式をそれ自身においてそれら固有の内容に従って考察したわけではなく、それらを主観的な論理学から前提として無思慮に受け取った。したがってそれらをそれら自身のうちで導出することも、ましてやそれらを弁証法的に考察することも問題とはならなかったのである。」(『大論理学』第二版「論理学の一般的概念」)
- (4) 「ノルウェーで G.E. ムーアに対して口述されたノート」(1914年4月)は『草稿 1914-1916』の付録として収録されており、「112a」は『草稿』第2版の頁数とパラグラフ番号 (p.112 の第一パラグラフ) を示す。なおこの「ノート」は英語での口述である。
- (5) 「存在するもの」または「がある Dasein」が存在の領域を表わすのに対して、『『存在』または『である Sosein』とは各領域に関して一義的ならずとも、類比的に共通なる点を指示し、存在の各領域に遍通する様式性を有して居る」(松本正夫『『存在』の論理学研究』 p.11)。
- (6) ただし「桜の花が」という展叙成分(主語文節)と「咲く」や「散る」という統叙成分(述語文節)とがなぜ結びうるのか、また連体成分「桜の」は「花」の概念をなぜ修飾しうるのか、文や文節の内に留まりつつこれらの問いに答えるには、論理的なものへの配視が欠かせない(森重敏『日本文法通論』)。問われているのは言語的単位を単位たらしめる「切れ続き」すなわち不連続にしてかつ連続である、そのことだからである。同様に「論理的構文論」においても、「文(命題) Satz」が文としてある、その論理が探究されるだろう、「哲学的な問題はわれわれの言語の論理の誤解に基づく」(『論考』序)、そもそもこれがウイトゲンシュタインの問題意識なのであったから。
- (7) 本稿はウイトゲンシュタインを主題にしていないので注にとどめる。明けの明星が宵の明星だということを或る人が知っているか否か、それはその人の経験次第

である。だからウィトゲンシュタインが「論理的構文論においては、記号の意味は何ら役割を果たしてはならない」と言うのは、カントが経験知の僭権の使用を戒めたことに通じる。けれどもウィトゲンシュタインがそこに留まらないことは、『論考』の冒頭「世界は、当の場合であることのすべてである **Die Welt ist alles, was der Fall ist**」に明らかである。ここでは「世界」（普遍的なもの・絶対的なもの）が「当の場合であることのすべてである」と規定され、他者（当の場合でない）ではない。つまり世界は実体でなく属性として把握されている。それゆえ、カントのように「抽象的な自己との同一性において対立が脱落している」（ヘーゲル）ということはないのである。

- (8) 本稿「付録」が示すように、ウィトゲンシュタインの『論考』はその論理の展開において『大論理学』と歩みをとにするが、その『論考』「序文」に「私がここに書いたことは、そもそも一つ一つを見ても新しさ **Neuheit** を主張するものではない」と記される。またヘーゲル弁証法とソシュール言語学の強い影響のもと、国語学において論理主義の立場を採った森重敏は、その著書『日本文法通論』の「序」に「思索はあくまでオオソドクスであるように努めた……その結果、まことに平凡な結論に達したことに、一つの安心を覚える」と記している。これらの発言もまた、「論理」が「人間にとって自然的なもの」・「人間固有の本性そのもの」であることを踏まえている。
- (9) 「価値形態にかんする部分を別とすれば、本書を難解だと言って非難することはできないであろう」というのだから「価値形態にかんする部分」は「難解」であり、また初版の「前書き」には「第一章、ことに商品の分析を収める節の理解は、もっとも困難であろう」と書かれるのだから、『資本論』はやはり「難解」なのだと主張する向きもあるかもしれない。けれどもここでマルクスが「難解」を言うのは、「すべて始めは難しいということは、どの学にもあてはまる」（初版「前書き」）という言明にかかわってのことであり、そしてこの言明自体はヘーゲルが「学は何を始めとしなければならないか」（『大論理学』存在論）で説いていることを承けている。つまり「価値形態にかんする部分」ないし「第一章」の「難解」は、それが「学の始め」であるからにはほかならない。だからそれらは、ヘーゲルが説いたように、「前進即後退」の弁証法論理において氷解する。その弁証法を把握する限り、やはり『資本論』を「難解だと言って非難することはできない」のである。
- (10) 以文社版『大論理学』1 付論四 p.501。
- (11) ヘーゲル自身が「この〔弁証法の〕方法の進行に従わず、その簡明なリズムに乗らない叙述は学問的と見なされえないことは明らかだ」（再掲）と述べていることを想起しよう。学問的叙述とは弁証法的に進行する文の連なり以外の何ものでもない。
- (12) 一般に、『資本論』研究者による論理の探究は、『大論理学』研究者が『大論理学』に向き合う精緻さに及ばないのではないか。後者の例として寺沢恒信による

なぜ『資本論』は『大論理学』のように見えるのか？

『大論理学』の正確な訳文と詳細な訳者注が想起される。このことに関連して、ヘーゲル論理学を「こじつけ」「屁理屈」と誇る傾向がマルクス研究者のなかにあるが、しかし「こじつけ」や「屁理屈」であれば、それをいくら逆立ちさせてもマルクスの認めた「合理的な核心」は見つかるまい。こうしたヘーゲル評ではマルクスのヘーゲル帰依は理解されず、また『『資本論』が『大論理学』のように見える』こともない。先入見を排し、『資本論』の論理を虚心に探究することが何よりも求められよう。

- (13) 「模倣・反復」を、最初に試みた者と模倣者・反復者との一種の対話と見ることができる。そして「慣用」において個別的な経験が超えられている。
- (14) このことは『資本論』におけるマルクスの独自性を毀損することではない。そもそも「論理学」に対して個別学問としての『資本論』の存在は独自のものあり、また『大論理学』の論理を模倣するにしても、そのどこの叙述を採るかということは後続者自身が考えることである。具体的に述べれば、『資本論』は『大論理学』存在論に直接対応する叙述をもたない。「商品」章第一節の論理が一对一の対応を示すのは、『大論理学』本質論根拠章「制約 *Bedingung*」の論理である。

[付録]

「『資本論』は『大論理学』のように見える」、では実際どのように見えるのか。そのことを知るには具体例に当たるのが一番である。すなわち「論理的構文論」の立場に立って両テキストを読み解くのだが、その読解に資するべくここではさらにソシュール「第3回講義」とウィトゲンシュタイン『論考』をも併せ読み、四者の論理的通底を示してみたい——ソシュールとウィトゲンシュタイを採り上げるのは、かれらは『大論理学』と『資本論』を読んでいるという私見に基いてのことである。ただし「論理」を把握する立場からは、それが誰であれ、またいかなるテキストであれ、「○○は××を読んだ」か否かは「本質的なもの」ではない。このことは上に引いた『論考』3-33の説くところでもある——。

以下で採り上げるのは四テキストの次の範囲である。

『大論理学』: 本質論第3編「現実性」第2章「現実性」の「C 絶対的必然性」4パラグラフ第9文～5パラグラフ第7文

『資本論』: 第5章「労働過程と価値増殖過程」第2節「価値増殖過程」の23パラグラフ第17文～24パラグラフ第7文

「第3回講義」：1910年12月6日末尾までの5文～1910年12月9日
冒頭からの3文

『論考』：3-33～3-3411

ここでは「必然性は自己を偶然性として規定するその当のものである」(『大論理学』)、その論理が説かれるから、「類比的同一性」に関して述べた本文の補論にもなるはずである。はじめに四つのテキストの叙述を列挙し、次いで論理の展開を説明する。

(1)

<大> C 絶対的必然性 4パラグラフ 第9文

実在的必然性があの [両] 契機を否定的に定立する運動はこのことによってそれ自身が前提する運動である、換言すれば自分自身を揚棄された必然性ないしは直接態として定立する運動である。Ihr negatives Setzen jener Momente ist dadurch selbst *das Voraussetzen* oder Setzen *ihrer selbst als aufgehobener* oder der *Unmittelbarkeit*.

<資> 23パラグラフ 第17文

労働力はまる一日作用し労働することができるにもかかわらず、労働力の日々の維持は半労働日しか要しないという事情、それゆえ、労働力の一日のあいだの使用が創造する価値がそれ自身の日価値の二倍の大きさであるという事情は、買い手にとっての特殊な幸運ではあるが、決して売り手に対する不当行為ではないのである。Der Umstand, daß die tägliche Erhaltung der Arbeitskraft nur einen halben Arbeitstag kostet, obgleich die Arbeitskraft einen ganzen Tag wirken, arbeiten kann, daß daher der Werth, den ihr Gebrauch während eines Tags schafft, doppelt so groß ist als ihr eigener Tageswerth, ist ein besonderes Glück für den Käufer, aber durchaus kein Unrecht gegen den Verkäufer.

<第3回講義> 1910年12月6日

別の表現 Autre expression : 英語の *th* の音。le son du *th* anglais.

<論考> 3-33

論理的構文論においては、記号の意味は何ら役割を果たしてはならない In der logischen Syntax darf nie die Bedeutung eines Zeichens eine Rolle spielen ; 論理的構文論は記号の意味が問題になることなく立てられねばならず、諸表現の記述だけを前提しうる。sie muß sich aufstellen lassen, ohne daß dabei von der *Bedeutung* eines Zeichens die Rede wäre, sie darf *nur* die Beschreibung der Ausdrücke voraussetzen.

まず『大論理学』だが、「実在的必然性」については以文社版邦訳者（寺沢恒信）が次の注解を与える。

必然性は現実性であるということはこれまでにしばしば述べられ、先には「形式規定の直接的な統一としてのこの必然性は現実性である。だが[この現実性は]、その統一がいまや形式規定の・すなわち自己自身と可能性との区別に対して無関心的と規定されているので、一つの内容をもっている、そのような現実性である」と述べられていた。そこでこのようにいわれたのは、そこでは現実性は形式的現実性であり、可能性は形式的可能性だったからである。ところがいまや、ここでの現実性は実在的現実性であり、可能性において自己自身と合体するのであるから、「一つの内容をもっている、そのような現実性」ではなくて、「形式の自己自身とのこの単一な合体する運動としてある、そういった現実性」である。——だがこのようにいわれる場合の現実性とは、現実性が必然的に現実性になるという運動そのものであるから、必然性にほかならない。(以文社版『大論理学』2 p.417 訳者注 77)

つまり「実在的必然性の両契機」とは現実性と可能性だが、ではこうした必然性の両契機への言及は何ゆえか。これについても寺沢の注解が有益である。

第二章「現実性」は……自己自身の運動によって生みだす形式をそなえ

ている「絶対的なもの」を展開し・叙述することを目的としている。……
[絶対的なもの(必然性)が相対的なもの(偶然性)を前提する運動と相対的なものから絶対的なものへと還帰する運動という]この二つの運動がまだ分離している限り、絶対的なものからなぜまたいかにして相対的なものが生れるかはまだ説明されていない。これを説明するためには、必然性(絶対的なもの)が「自己を規定して自己自身から偶然性にいたる」ゆえんが展開されなければならない。これを展開することがこれから後の叙述においてヘーゲルがめざしているものなのである。(同 p.411 訳者注 65)

そして「C 絶対的必然性」5 パラグラフ第 7 文に「それだから必然性は自己を偶然性として規定するその当のものである」と説かれるように、現実性・可能性という両契機が展開して当初の目的に達するのが、ここ [付録] で読解する一連である。

さて、「この両契機を否定的に定立する運動」の具体例として、「試み」られた「*Kränze*」(*Kranz* の複数)の「模倣・反復」を挙げることができる。それは「現実性が必然的に [新しい] 現実性になるという運動そのもの」(寺沢注再掲)だからである — 「新しい」は 5 パラグラフ第 3 文を先取りしている —。仮に *Kränze* が「明日の目知らぬ結合」(再掲)に終われば「可能性は形式的可能性だった」のだが、いまは「模倣・反復」されて「慣用」への途次にある — 現代ドイツ語で *Kränze* はすでに「慣用」である —。つまり「いまや、ここでの現実性は実在的現実性であり、[自身の] 可能性において自己自身と合体している」(寺沢注再掲)、それが「新しい現実性」である — 言語学的には伝承形と競争形との「共存 *coexistence*」であり、両形は「いずれを用いても差し支えない」(『講義』 p.228)。日本語でも、「食べられる」と「食べれる」の使用者は現在ほぼ半々といわれる —。だから「この [両] 契機を否定的に定立する運動はそれ自身が前提する運動である」。すなわち伝承形 *Kranza* が前提され、だがいまやそれが競争形 *Kränze* との「共存」にある — 「両契機を否定的に定立する」 — のが「模倣・反復」である。このとき実在的必然性の運動は「自分自身を揚棄された必然性ないしは直接態として定立する運動である」。以前 *Kranz* の複数は *Kranza* でなければならなかったが、その「伝承形」が「競

争形」と「ないしは *oder*」で結ばれている・換言して *Kranza* が *Kränze* (試みられた「直接態」との競争を余儀なくされているからである。

「第3回講義」はいささか分かりにくい。関連する『講義』の叙述を引いておこう。

<講義> Bopp さえもが、文字と音声との区別をはっきり立てていない；彼のものを読むと、言語はアルファベットと不可分のもののような気がする。彼の後輩たちも、同じ罫に落ちこんだ；摩擦音の *P* に対する *th* という書法は GRIMM をして、この音がただに二重音であるのみならず、なおそのうえ帯気密閉音であると信ぜしめた；彼がその子音推移、つまり "Lautverschiebung" の法則のなかで、この音にあのような位置を与えたのは、そのためである。(p.41)

つまり *th* は「摩擦音の *P* に対する書法」であり、「音」を「或る表現 *une expression*」とすれば、いわばその競争形たる「別の表現 *autre expression*」である。それゆえ伝承形と競争形に関して上に述べたことがここでも妥当する。

これを『資本論』に準えてみる。『資本論』では、「労働力はまる一日作用し労働することができるにもかかわらず、労働力の日々の維持は半労働日しか要しないという事情」が指摘される。言語では同様に、「摩擦音 *P* は『或る表現』で表現できるにもかかわらず、『別の表現』で表現される」のである。そして後者において「或る表現」と「別の表現」とが「実在的必然性の両契機」であるように、『資本論』では「労働力」の「或る表現」(それ自身の日価値)と「別の表現」(その一日のあいだの使用が創造する価値)とは「実在的必然性の両契機」である。そして「両契機を否定的に定立する運動」は「実在的必然性」の運動なのだから、「労働力の一日のあいだの使用が創造する価値がそれ自身の日価値の二倍の大きさであるという事情は、買い手にとっての特殊な幸運ではあるが、決して売り手にたいする不当行為ではない。必然性についてその当不当を言うことはできないからである。

ところで、ここでの「特殊な幸運 *ein besonderes Glück*」は *Kränze* が手

にする「幸運 *la bonne fortune*」と別のものではない——「すべての類推的改新が、そのような幸運にありつくわけでは、なかなかない」（再掲）——。それゆえ、「試み」が「模倣・反復」され「慣用」に到ることが偶然的「幸運」であるように、「労働力の買い手」が手にする「幸運」も偶然的である。ただしその「偶然性」は、「必然性」が「自己を規定して自己自身から偶然性にいたる」（再掲）、その「偶然性」である。つまり「模倣・反復」においては「慣用」への歩みがすでに始まっているように、ここでの「偶然性」（幸運）もすでに「必然性」に向かって歩み始めている。

その事情は『論考』に明らかである。「明けの明星はその公転周期が地球のそれより小さい惑星である」は「或る表現」・「宵の明星はその公転周期が地球のそれより小さい惑星である」は「別の表現」である。「記号の意味が役割を果たす」とき、「明けの明星が宵の明星だということを知らない」といった「無知」が問題になることは上に見た。けれども「或る表現」と「別の表現」はいま「実在的必然性の両契機」であり、両者はいわば伝承形と競争形として「いずれを用いても差し支えない」。「形式的必然性」のもとで問題となった「無知」は、すでに解消されている。

(2)

<大> C 絶対的必然性 5 パラグラフ 第 1 文

だがまさにこの点でこの現実性は否定的なものとして規定されている
Eben darin aber ist diese Wirklichkeit bestimmt als Negatives ;

<資> 24 パラグラフ 第 1 文

わが資本家には、彼に笑いをもたらずこのことはあらかじめわかっていたのである。**Unser Kapitalist hat den Casus, der ihn lachen macht, vorgesehen.**

<第 3 回講義> 1910 年 12 月 6 日

約定——それは音 *P* を表現する仕方であるが——の実在性を支配する別の

方法。Autre manière de faire dépendre la réalité d'une convention, qui est la façon de représenter le son \bar{P} .

<論考> 3-331

この見解より、われわれはラッセルの「タイプ理論」に引導を渡す Von dieser Bemerkung sehen wir in Russells "Theory of Types" hinüber : ラッセルの誤りは、記号規則を定めるに際し記号の意味について語らねばならなかった点に示される。Der Irrtum Russells zeigt sich darin, daß er bei der Aufstellung der Zeichenregeln von der Bedeutung der Zeichen reden mußte.

『大論理学』で「この現実性」は、「形式の自己自身とのこの単一な合体する運動としてある、そういった現実性であり」（寺沢注再掲）、それは「自分自身を揚棄された必然性として定立する」ところの實在的必然性の運動なのだから、「この現実性は否定的なものとして規定されている」。「第3回講義」に即して言えば、「約定の實在性を支配する方法」に二つあり、すなわち「一つの方法 *une manière*」と「別の方法 *autre manière*」である。そして「別の方法」はいわば「一つの方法」に対する競争形であるから、「否定的なものとして規定されている」。

『論考』である。「記号規則 [記号の約定] を定める」、その定め方 [約定の實在性を支配する方法] に二つある。「一つの方法」はラッセルの「タイプ理論」であり、これは「記号規則を定めるに際し記号の意味について語る」。「別の方法」は3-33に説かれた「論理的構文論」であり、これは「諸表現の記述だけを前提しうる」。二つのうち前者「タイプ理論」は「誤り」であり、対する後者「論理的構文論」は誤りを正すべく「[誤りの] 否定的なものとして規定されている」。

『資本論』では「彼 [資本家] に笑いをもたらす」ということが「約定」である。そしてここでも「約定の實在性を支配する方法」に二つある。「一つの方法」は先行パラグラフで紹介されている。すなわち「生産物の価値が、前貸しされた資本の価値と同じである」(20パラグラフ) ことを知った資本家が、

「自分の節約を考えてもらいたい」(21 パラグラフ) 等々の「長たらしい連禱でわれわれをへきえきさせた」(22 パラグラフ)、その「連禱 [愚痴] Litanei」である。対する「別の方法」がここで述べられ、すなわち「資本家にはあらかじめわかっていたこのこと [状況]」である。ここでも競争形たる「別の方法」は「[連禱の] 否定的なものとして規定されている」——「しかし、そうこう [連禱] するうちに、彼は、もう快活な笑いとともに、もとの顔つきに帰ってしまった」(22 パラグラフ) ——。

(3)

<大> C 絶対的必然性 5 パラグラフ 第 2 文

それは、実在的可能性であったところの現実性からでて自己と合体する運動である。sie ist ein Zusammengehen aus der Wirklichkeit, welche reale Möglichkeit war, mit sich ;

<資> 24 パラグラフ 第 2 文

それゆえ、労働者は、作業場において、6 時間だけでなく、12 時間の労働過程のために必要な生産諸手段を見出す。Der Arbeiter findet daher in der Werkstätte die nöthigen Produktionsmittel nicht nur für einen sechsständigen, sondern für einen zwölfständigen Arbeitsproceß.

<第 3 回講義> 1910 年 12 月 6 日

人はときおり、書写記号をすべてに先在するように見える架空の存在に変える。Quelquefois on fait d'un signe graphique un être fictif qui semble préexister à tout.

<論考> 3-332

いかなる命題も自分自身について或ることを述語することはできない、なぜなら命題記号は自分自身に含まれないから (これが「タイプ理論」の全体である)。Kein Satz kann etwas über sich selbst aussagen, weil das

Satzzeichen nicht in sich selbst enthalten sein kann (das ist die ganze “Theory of Types”).

『大論理学』で「それ」とは、「否定的なものとして規定されている」ところの「現実性」である。例に即しては競争形 *Kränze* だが、それは「実在的可能性であったところの現実性からでて自己〔伝承形〕と合体する運動である」—— 'zusammengehen'には「協力する・提携する」の意義がある。伝承形と競争形の「共存」はこれである——。

「第3回講義」である。「摩擦音の *P* に対する *th* という書法は GRIMM をして、この音がただに二重音であるのみならず、なおそのうえ帯気密閉音であると信ぜしめた」（再掲）が、これは「*t*：歯音型の密閉音」、「*h*：帯気音」だからである。つまり GRIMM は「書写記号 *th* をすべてに先在するように見える架空の存在に変えた」のである。「faire A de B」は「A を B にする」であるから「書写記号 *th*」は「実在的可能性であったところの現実性」であり、「すべてに先在するように見える架空の存在」はそれ自身が書写記号なのであるから「自己〔書写記号 *th*〕と合体している」。

命題「現在のフランス王は禿げである」をめぐってのヘーゲルへの揶揄に見られるように⁽¹⁾、ラッセルは弁証法に対して無理解である。『論考』3-332が説くのはこのことであり、「タイプ理論」は同語反復を「空虚な同語反復の表現以上のもの」（再掲）に把握することができない——「命題記号は自分自身に含まれない」——。例えばいま「書写記号はすべてに先在するように見える架空の存在〔書写記号〕である」が、この同語反復は「実在的可能性であったところの現実性からでて自己と合体する運動である」・つまり「現実性」において「形式は自己自身との単一な合体する運動としてある」（寺沢注再掲）。このように、弁証法は「タイプ理論」の「形式的な・抽象的な・不完全な真理態」（WdL II S.42）を超えている。

「第3回講義」を『資本論』に準えて言い換えるならば、「人は、言語場において、書写記号だけでなく、すべてに先在するように見える架空の存在〔書写記号〕を見出す」のである。同様に『資本論』においても、人は「12時間の労働過程のために必要な生産諸手段を見出す」のであり、それは「実

在的可能性であったところの現実性からでて自己と合体する運動である」。

(4)

<大> C 絶対的必然性 5 パラグラフ 第3文

したがってこの新しい現実性は自分の即自存在・すなわち自分自身の否定からのみ生成する。also wird diese neue Wirklichkeit nur aus ihrem Ansichsein, aus *der Negation ihrer selbst*.

<資> 24 パラグラフ 第3文

10 ポンドの綿花が 6 労働時間を吸収して 10 ポンドの糸に転化したとすれば、20 ポンドの綿花は 12 労働時間を吸収して 20 ポンドの糸に転化するであろう。Saugten 10 \mathcal{U} Baumwolle 6 Arbeitsstunden ein und verwandelten sich in 10 \mathcal{U} Garn, so werden 20 \mathcal{U} Baumwolle 12 Arbeitsstunden einsaugen und in 20 \mathcal{U} Garn verwandelt.

<第3回講義> 1910年12月6日

フランス人は *an* (鼻音の *a*) を、*a* のように発音する。Les Français prononcent *an* (*a* nasal) comme *a*.

<論考> 3-333

或る関数はそれ自身の項であることはできない、なぜなら関数記号はすでにその項の原像を含んでおり、また自身を含むことはできないから。Eine Funktion kann darum nicht ihr eigenes Argument sein, weil das Funktionszeichen bereits das Urbild seines Arguments enthält und es sich nicht selbst enthalten kann.

次のように仮定しよう、関数 $F(\text{fx})$ は自身の項でありうる Nehmen wir nämlich an, die Funktion $F(\text{fx})$ könnte ihr eigenes Argument sein ; それゆえこのとき或る命題が存する dann gäbe es also einen Satz : 「 $F(F(\text{fx}))$ 」、そしてここにおいて外側の関数 F と内側の関数 F は差異された意味をもつ、と

なぜ『資本論』は『大論理学』のように見えるのか？

いうのは内側は形式 $\varphi(\text{fx})$ をもち、外側は形式 $\psi(\varphi(\text{fx}))$ をもつからである。“F(F(x))” und in diesem müssen die äußere Funktion F und die innere Funktion F verschiedene Bedeutungen haben, denn die innere hat die Form $\varphi(\text{fx})$, die äußere die Form $\psi(\varphi(\text{fx}))$. 二つの関数に共通なのは文字「F」だけだが、しかしそれは何ものも示さない。Gemeinsam ist den beiden Funktionen nur der Buchstabe “F”, der aber allein nichts bezeichnet.

このことはわれわれが「F(Fu)」の代わりに「 $(\exists \varphi): F(\varphi u) \cdot \varphi u = Fu$ 」と書くと、すぐに明らかになる。Dies wird sofort klar, wenn wir statt “F(Fu)” schreiben “ $(\exists \varphi): F(\varphi u) \cdot \varphi u = Fu$ ”.

かくしてラッセルのパラドクスは片が付く。Hiermit erledigt sich Russells Paradox.

『大論理学』である。「新しい現実性」は、「実在的可能性であったところの現実性からでて自己と合体する運動である」(前文)、そうした「現実性」であるから、「自分 [現実性] の即自存在 [可能性]・すなわち自分自身の否定からのみ生成する」と言われる。

『論考』の 1 パラグラフを『大論理学』の別表現と解することができる。すなわち「或る関数がそれ自身の項であることはできない」のは、「新しい現実性は自分自身の否定からのみ生成する」からである。そして「関数記号はすでにその項の原像を含んでいる」の例として、*Kränze* が *Kranza* と合体することを挙げれば、「新しい現実性は自分の即自存在からのみ生成する」と言える。そして「新しい現実性」はその「新しさ」において「自身を含むことはできない」。

2 パラグラフは「第 3 回講義」を具体例に読むことができる。フランス語の母音 *a* は開口度が大きく、中開口度の *e・o* や小開口度の *i・u* から区別される。その *a* はさらに調音域によって、調音域が後である *a* と、調音域が前である *a* に区別される。前者は [a], 後者は [a] である。そして「鼻音の *a*」は [ã] であるから調音域は後である。さて「フランス人は *an* (鼻音の *a*) を *a* のように発音する」—— これに対してソシュール (スイス人) はそのように発音しない——。「第 3 回講義」の別の原資料に“Les Français prononcent *an* (*a*

nasal) comme [ã]”とあることから、「ã」は鼻音風の[a]と思われる。ソシユールはこれを「荒唐無稽 burlesque」と断じているが、調音域の混乱を指してのことだろう⁽²⁾。ともあれフランス人のフランス語では「ãである a」([ã]である[a])が発せられる。

以上を『論考』2パラグラフの記号と対応させれば次のようになる。

f : 大開口度の母音

φ : 調音域が前

ψ : 調音域が前

「調音域が前」は「二つの関数に共通である」が、「しかしそれは何ものも示さない」。というのは一方はφ(fx)をもち、他方は形式ψ(φ(fx))をもつというように、二つの関数は「差異された意味をもつ」からである。換言すれば、『資本論』で「労働者が、作業場において、6時間だけでなく、12時間の労働過程のために必要な生産諸手段を見出す」ように、「フランス人は、言語場において、調音域が前の a ([a]) だけでなく、鼻音を発するために必要な調音域が前の a ([ã]) を見出す」のである。そのように「[ã]である[a]を発する」ことは「新しい現実性」であり、「自分の即自存在 [いま a は「[ã]である[a]」であるから、その「即自存在」は本来の a ([a])]・すなわち自分自身の否定 [いまの「自分自身」すなわち「[ã]である[a]」の「否定」は本来の a ([a])]からのみ生成する」。「(∃φ):F(φu).φu=Fu」(3パラグラフ)のいみするところはこれである。すなわち「新しい現実性」[(∃φ):F(φu).φu=Fu]は、「F(φu)」「自分(Fu)の即自存在(φu)」・「φu=Fu」[右辺に対する左辺すなわち自分自身の否定]において存する[(∃φ)]。

ところで渡邊二郎は「ラッセルのパラドクス」について次を説いている(『英米哲学入門』)。

数学者の高木貞治は、このパラドクスを簡明に次のように定式化している。「それ自身を含まない集合」を「M集合」とし、「すべてのM集合を成分とする集合R」を作ってみる。そうすると、「任意の集合X」に関しては、「XはRに含まれる」⇔「XはXに含まれない」(ただし、「→」は左の仮説から右の終結を得ることを示す。したがって⇔は右と左との

なぜ『資本論』は『大論理学』のように見えるのか？

二つの命題が『同等』であることを意味する) という定式が成り立つ。そして特に $X=R$ とすれば、「 R は R に含まれる」 \Leftrightarrow 「 R は R に含まれない」となり、パラドクスが明示されると高木貞治は述べている。まことに明快な定式化であると思う。(p.197)

そこで「 X は R に含まれる」 \Leftrightarrow 「 X は X に含まれない」において「 $X=R$ 」(右辺は左辺の否定) とすれば、「ラッセルのパラドクスは片が付く」。

『資本論』では先行して、「労働力の日々の維持費と労働力の日々の支出とは、二つのまったく異なる大きさである」(23 パラグラフ) ことが説かれた。つまり「労働力の日々の維持費」は「即自存在」——「労働力の日価値は3シリングであり、この3シリングには6労働時間が体化されている」(18 パラグラフ)——、「労働力の日々の支出」は「新しい現実性」である。それゆえここでも、「新しい現実性は自分の即自存在[10ポンドの綿花が6労働時間を吸収して10ポンドの糸に転化する]・すなわち自分自身の否定[いまの「自分自身」すなわち「20ポンドの綿花が12労働時間を吸収して20ポンドの糸に転化する」、の「否定」]からのみ生成する」。

(5)

<大> C 絶対的必然性 5 パラグラフ 第4文

——このことによってこの新しい現実性は同時に直接に可能性として・自分の否定によって媒介されたものとして規定されている。Damit ist sie zugleich unmittelbar als *Möglichkeit* bestimmt, als *Vermitteltes* durch ihre Negation.

<資> 24 パラグラフ 第4文

われわれはこの延長された労働過程の生産物を考察してみよう。
Betrachten wir das Produkt des verlängerten Arbeitsprocesses.

<第3回講義> 1910年12月6日

この記号は神話的な存在としてほとんど言語の外にある。Ce signe est presque en dehors des langues comme un être mythologique.

<論考> 3-334

論理的構文論の諸規則は、各記号がどのように指示するかを人が知りさえすれば、自ずから理解されるのでなければならない。Die Regeln der logischen Syntax müssen sich von selbst verstehen, wenn man nur weiß, wie ein jedes Zeichen bezeichnet.

『大論理学』は前文で「この新しい現実性は自分の即自存在・すなわち自分自身の否定からのみ生成する」と説いた。「自分」が「自分の即自存在〔本来的存在〕」から成り *wird*、「自分自身の否定」から成るのだから、そうした「新しい現実性」は「同時に直接に〔古い現実性の〕可能性として・自分の否定〔古い現実性〕によって媒介されたものとして規定されている」。

「第3回講義」である。「この記号」は「*a*」〔*la*〕と発音される書写記号の *an* であり、それは「神話的な存在」だといわれる。「神話的」については『資本論』の次の一節が想起されよう。商品章第4節「商品の物神的性格とその秘密」の4パラグラフである。

<資> したがって、商品形態の神秘性は、たんに次のことである。すなわち、商品形態は、人間に対して、人間自身の労働の社会的性格を労働生産物そのものの対象的性格として、これらの物の社会的自然属性として反映させ、それゆえまた、総労働に対する生産者たちの社会的関係をも、彼らの外部に実存する諸対象の社会的関係として反映させるということにある。……ここで人間にとって物と物との関係という幻影的形態をとるのは、人間そのものの一定の社会的関係にほかならない。だから、類例を見出すためには、われわれは宗教的世界の夢幻境に逃げ込まなければならない。ここでは、人間の頭脳の産物が、それ自身の生命を与えられて、相互の間でも人間との間でも関係を結ぶ自立的姿態のように見える。商品世界

では人間の手の生産物がそう見える。(p.123)

「*an* (鼻音の *a*) を *q* のように発音する」のはフランス人のフランス語だけであって、スイス人のそれではない。つまりそれは「人間そのものの一定の社会的関係」——フランス人のフランス語という言語共同体——における「人間の口の生産物」である。そして「商品生産という歴史的に規定された社会的生産様式」(p.129)における「人間そのものの一定の社会的関係」が「物と物との関係という幻影的形態をとり」、それが「商品形態の神秘性 *das Geheimnißvolle*」であるように、フランス人のフランス語という「歴史的に規定された言語活動様式」における「人間そのものの一定の社会的関係」が「母音 *a* と鼻音との関係という幻影的形態をとり」、それが「神話的」だというのである——「荒唐無稽」な関係は或る種幻影的 *phantasmagorisch* であろう——。そして「幻影的形態」は、「手の生産物」であれ「口の生産物」であれ、「人間の外部にある *außerhalb* 物の対象的形態として現われる」(p.124)。つまり「神話的な存在は人間言語 [フランス語 *langue française*] の外に *en dehors* ある」。以上を『大論理学』に即して言えば、「*a* は *q* である」は「新しい現実性」である。それは「同時に [*a* の] 可能性として・自分の否定 [「自分」(*a* である *a*) の「否定」(*a*)] によって媒介されたものとして規定されている」。ただし「*a* は *q* である」はフランス語共同体の受け入れるところではなく、フランス人だけが「直接に」そう発音するのである。

『論考』もまた「第 3 回講義」を具体例に読まれる。「論理的構文論の諸規則は、各記号がどのように指示するかを人が知りさえすれば、自ずから理解されるのでなければならない」、これは無論フランス語話者についても言える。そして「記号 *an* が *a* (*[ā]*) を指示することを知っている」のは「*an* (鼻音の *a*) を *q* のように発音する」フランス人だけであり、スイス人は知らない。つまりフランス人フランス語の「論理的構文論の諸規則」は「新しい現実性」であり、それは「直接に [フランス語の] 可能性として・自分の否定によって媒介されたものとして規定されている」。その理解はフランス人だけの「自ずから」である——'*unmittelbar*'は'*nicht durch etw. Drittes*'であるから、'*von selbst*'は'*unmittelbar*'である——。

『資本論』である。先行するパラグラフでは、「商品の生産過程は労働過程と価値形成過程との統一でなければならず」（2 パラグラフ）、「そこで、こんどはわれわれは、生産過程を価値形成過程として考察することにしよう」（3 パラグラフ）と説かれていた。「考察する」ことは「知る」ことだから、「労働過程の生産物を考察する」ことで「生産過程」——『論考』に準えてその「規則」——が把握される。そして「延長された労働過程」は「労働過程」の「新しい現実性」であり、それは「直接に〔労働過程の〕可能性として・自分の否定〔たる労働過程〕によって媒介されたものとして規定されている」。その限り「延長された労働過程」は「価値形成過程」である。

(6)

<大> C 絶対的必然性 5パラグラフ 第5文

けれどもそれとともにこの可能性は直接にこの媒介する運動にほかならず、この運動においては即自存在・すなわち可能性そのものと直接態との両者は同じ仕方 で 定立された存在である。Diese Möglichkeit aber ist somit unmittelbar nichts als *dies Vermitteln*, in welchem das Ansichsein, nämlich sie selbst und die Unmittelbarkeit beide auf gleiche Weise *Gesetzsein* sind.

<資> 24パラグラフ 第5文

20 ポンドの糸には、いまや 5 労働日が対象化されている。4 労働日は消費された綿花および紡錘の量に対象化され、1 労働日は紡績過程のあいだに綿花によって吸収されている。[原書は一文]In der 20 ℥ Garn sind jetzt 5 Arbeitstage vergegenständlicht, 4 in der verzehrten Baumwoll- und Spindelmasse, 1 von der Baumwolle eingesaugt während des Spinnprocesses.

<第3回講義> 1910年12月9日

これらの種々の作りごとは文法的な諸規則において自己を顕現する。Ces différents fictions se manifestent dans des règles grammaticales.

<論考> 3-34

命題は本質的な、また偶然的な諸特徴をもつ。Der Satz besitzt wesentliche und zufällige Züge.

偶然的なのは、命題記号生産の特定仕方に由来する特徴である。Zufällig sind die Züge, die von der besonderen Art der Hervorbringung des Satzzeichens herrühren. 本質的な特徴は、命題をしてその意義を表現できるようにするものだけである。Wesentlich diejenigen, welche allein den Satz befähigen, seinen Sinn auszudrücken.

『論考』の読解が『大論理学』の読みを助ける。後者で「この可能性」は「新しい現実性」であり、「自分の否定によって媒介されたもの」(前文)である。そこで「可能性」を「S」・「その否定」を「P」と置けば、SがPによって媒介されたものであるのは命題「SはPである」においてである。そこで「この可能性は直接にこの媒介する運動 [SはPである] にほかならない」と謂う——前文でその規定が「直接的」であった「新しい現実性」が、ここではそれ自身「直接に」ではあれ「媒介する運動」として働く——。「SはPである」(媒介する運動)において、「S」は「即自存在・すなわち可能性そのもの」であり、そのSを現実的なもの(PであるS)たらしめる「P」は「直接態」(外面態)である⁽³⁾。「命題」(SはPである)において「SがPである」こと(可能性が現実性であること)は「本質的な特徴」だが、ただし外面態は「P」のみならず「Q」でも「R」でもありうるから、「命題は[本質的な特徴のもとで]偶然的な特徴をもつ」。かくして「命題は本質的な、また偶然的な諸特徴をもつ」。

「第3回講義」は以上の具体例だが、まずは関連する『講義』の叙述を参照する。

こうした作りごとは、文法規則のなかにまで現われる、例えばフランス語におけるhのそれに。わが国語[フランス語]には初頭母音が帯気法を伴わないのに、そのラテン形態の名残りを留めて、hをもつ語がある；かくしてhomoのゆえにhomme(古くはome)。しかしゲルマン語由来の語では、hが実際に発音された：hache、hareng、honte、etc. 帯気法が存続

していた限り、これらの語は初頭子音に関する法則に従い、*deu haches*、*le hareng* と言ったのに対し、母音で始まる語の法則に従い *deu-zommes*、*l'omme* と言った。その時代には、「帯気音の *h* の前では、リエゾンと除音 [エリジョン] は行なわれない」という規則は正しかった。ところが現在は、この公式は意味うつろである；帯気音の *h* なるものは、もう存在しないのだ；もっともこの名称が、ある音ではなくて、その前ではリエゾンも除音も行なわない、ということの意味するとすれば別であるが。それゆえそれは循環論であって、*h* は書に由来する作りごとの存在にすぎないのだ。(p.47)

第1文「こうした作りごとは、文法規則のなかにまで現われる、例えばフランス語における *h* のそれに」の原語は“*Ces fictions se manifestent jusque dans les règles grammaticales, par exemple celle de l'h en français.*”である。前半は「第3回講義」そのままであり、後半は「第3回講義」の次文である。そこで本稿も、「作りごと *fiction*」ないし「作りごとの存在 *un être fictif*」を「フランス語における *h*」に関わって論ずる — ここで「フランス語における *h*」とは「フランス語における帯気音 *h*」であり、*homme* の *h* がそれに含まれないことは後に説かれる。なお '*fiction*' はラテン語 '*fictiō*' (← *fingere* 形作る) に由来するので、以下では '*fiction*' を「作ること」と訳す。また '*fictif*' の語源たるラテン語 '*fictis*' は '*fingere*' の過去分詞であり、それゆえ '*un être fictif*' は「作られたもの」「生産物」である —。

さて「作ことは文法的な規則において自己を顕現する [それ自身である]」。そこでこれを『資本論』に準えて：「文法的な規則には、作ることが対象化されている」 — 「対象化」とは「労働過程のなかで、労働が絶えず不静止の状態から存在の形態に、運動の形態から対象性の形態に転換する」(14 パラグラフ) ことである。つまり運動形態の「作ること」は文法的な規則 (対象・直接態) において「対象性の形態」である —。そこでこれより命題「作ことは文法的な規則である」が得られ、換言して「この可能性 [作ること] は直接に [つまり直接態に現われて] この媒介する運動 [作ことは文法的な規則である] にほかならない」。

前文ではフランス人が「直接に」規定したフランス語を採り上げた。ここでは「フランス語における *h*」が考察される。換言すればフランス語共同体

の「現在 *actuellement*」だが、それが「直接に」把握される。以下『大論理学』後半との対応である。

「ゲルマン語由来の語 *hareng*」と「ラテン形態の名残りを留める語 *homme*」とを比べ、*le hareng* の発音が [lɑ-arɑ̃] である一方、*l'homme* のそれは [lɔm] である — 以下除音の例のみ採り上げる —。「わが国語には初頭母音が帯気法を伴わない」のだから、除音が働いて母音連続を避ける後者が一般的だが⁽⁴⁾、ではなぜ *le hareng* を [lɑ-arɑ̃] と発音するのか。かつて「ゲルマン語由来の語では、*h* が実際に発音され、帯気法が存続していた限り、これらの語は初頭子音に関する法則に従い *le hareng* と言った」、このことを「現在」のフランス語が踏襲するからである。*le hareng* はいわば現代フランス語の原料であり、原料は「即自存在・すなわち可能性そのもの」である。そこで『資本論』に準えて：「かつての発音が *le hareng* に対象化されている」。これも『資本論』に準えて：「[h] が発音過程のあいだに原料 *le hareng* によって吸収されている」、だからである。「初頭母音が帯気法を伴わない」のだから [h] は必要以上の「剰余 *Mehr*」であり、その剰余を吸収しての母音連続 *hiatus* すなわち「直接態」である — '*hiatus*' の語源のラテン語 '*hiātus*' は「開くこと」であり、例えば埋立てにより島を直接結ぶ道路が開通するイメージ —。

さてフランス語話者は *le hareng* を [lɑ-arɑ̃] と発音する — つまり「*le hareng* は [lɑ-arɑ̃] である」 — が、それは *hareng* が「ゲルマン語由来の語」（借用語）だからである。借用が偶然的であることは言うまでもない。つまり「偶然的なのは、命題記号 [*hareng*] 生産の特定仕方 [借用] に由来する特徴である」。対する「本質的な特徴」、すなわち「命題 [*le hareng* は [lɑ-arɑ̃] である] をしてその意義を表現できるようにするもの」が「剰余の吸収」であることは言うまでもない — いま「命題の意義」は除音が妨げられて母音連続すること・すなわち '*l'homme* は [lɔm] である」との価値的差異である —。ただし仮に *le hareng* が *l'areng* と綴られ [larɑ̃] と発音されるならそこに吸収は認められず、したがって「即自存在・すなわち可能性そのもの」も存しない。即自存在は吸収されてこそその即自存在である。このように「この [媒介する] 運動においては即自存在・すなわち可能性そのものと直接態との両者は同じ仕方 [剰余の吸収] で定立された存在である」。

『資本論』で「いまや jetzt」とは、第1節「労働過程」から第2節「価値増殖過程」に入り、「彼〔資本家〕は、使用価値だけでなく商品を、使用価値だけでなく価値を、しかも価値だけでなく剰余価値をも、生産しようとする」（1パラグラフ）の、その「いま」である。そして「わが資本家には、彼に笑いをもたらずこのことはあらかじめわかっていた」（第1文）のだから、すでに剰余価値は生産されている。つまり「5労働日」は「この〔剰余価値を形成する〕可能性」である。それは「直接にこの媒介する運動にほかならない」。「20ポンドの糸には、5労働日が対象化されている」とは、「5労働日は20ポンドの糸である」（5労働日は20ポンドの糸においてそれ自身である）ことを謂うからである⁽⁵⁾。そして「20ポンドの糸」の「生産の特定仕方」を考察すると、ここでも「生産物」は「剰余」を含んでいる。

「第3回講義」の事例を『資本論』に準えてみる：「文法的な規則には、作ることが対象化されている」。すると「作ることが文法的な規則〔文を生産する規則〕において自己を顕現する」ように、「5労働日は生産物を生産する規則において自己を顕現する」。後者の「規則」は「4労働日は消費された綿花および紡錘の量に対象化され、1労働日は紡績過程のあいだに綿花によって吸収されている」、これである。「生産諸手段」（10パラグラフ）たる「消費された綿花および紡錘」が「即自存在・すなわち可能性そのもの」であり、「綿花による吸収」が「直接態」であることはよからう。そして「この〔媒介する〕運動においては即自存在・すなわち可能性そのものと直接態との両者は同じ仕方〔商品生産〕で定立された存在である」。というのは――

「ある使用価値が労働過程から生産物として出てくるとき、それ以前の労働過程の諸生産物である他の諸使用価値が生産手段としてこの労働過程にはいり込む」（p.310）と説かれるように、「即自存在・すなわち可能性そのもの」は「かつて」の「踏襲」である。けれども「ここでは商品生産〔つまり剰余価値の生産〕が問題なのである」（2パラグラフ）から、何が踏襲されるか・「即自存在・すなわち可能性そのもの」の何であるかは「生産物生産の特定仕方」に由来する特徴」として「偶然的」である。対する「本質的な特徴」、すなわち「命題〔5労働日は20ポンドの糸である〕をしてその意義を表現できるようにするもの」は「剰余の吸収」である――いま「命題の意義」は労働の

なぜ『資本論』は『大論理学』のように見えるのか？

対象化によって「価値だけでなく剰余価値をも生産する」ことである——。実際「ここ〔価値形成過程〕では、原料は一定部分の労働の吸収者としてのみ意義をもつ」（16 パラグラフ）のであった。ただし「いまや」剰余を吸収しない生産は問題外である。だから仮にそうした生産があっても、そこに吸収は認められず、したがって「即自存在・すなわち可能性そのもの」も存しない。即自存在は吸収されてこそその即自存在である。このように「この〔媒介する〕運動においては即自存在・すなわち可能性そのものと直接態との両者は同じ仕方〔剰余の吸収〕で定立された存在である」。

(7)

<大> C 絶対的必然性 5 パラグラフ 第6文

こうしてこの媒介する運動は、この定立された存在を揚棄する運動ないしは直接態および即自存在を定立する運動であるとともに、またまさにこの点においてこの揚棄する運動を定立された存在として規定する運動であるところの必然性である。So ist es die Notwendigkeit, welche ebenso sehr Aufheben dieses Gesetzseins oder Setzen der *Unmittelbarkeit* und des *Ansichseins* sowie eben darin *Bestimmen* dieses Aufhebens als *Gesetzseins* ist.

<資> 24 パラグラフ 第6文

ところが、5 労働日の金表現は 30 シリング、言い換えれば 1 ポンド・スターリング 10 シリングである。Der Goldausdruck von 5 Arbeitstagen ist aber 30 sh. oder 1 Pfd. St. 10 sh.

<第3回講義> 1910年12月9日

こうしてフランス語の帯気音 *h* の規則。Ainsi la règle de l'*h* aspiré français.

<論考> 3-341

こうして命題において本質的なものは、同じ意義を表現することができるすべての命題に共通なものである。Das Wesentliche am Satz ist also das, was allen Sätzen, welche den gleichen Sinn ausdrücken können, gemeinsam ist.

同じく、一般にシンボルにおいて本質的なものは、同じ目的を果たすことのできるすべてのシンボルが共通にもっているものである。Und ebenso ist allgemein das Wesentliche am Symbol das, was alle Symbole, die denselben Zweck erfüllen können, gemeinsam haben.

『大論理学』で「この定立された存在を揚棄する運動」とは、「この〔媒介する〕運動においては即自存在・すなわち可能性そのものと直接態との両者は同じ仕方定立された存在である」(前文)と説かれた、その「定立された存在」を「揚棄する運動」である。なぜ「定立された存在」が揚棄されるのか。「フランス語の帯気音 *h*」が例である。なるほど「現在」*le hareng* の発音は [la-arā] だが、かつては「*h* が実際に発音された」ので、そこに剰余は存しなかった。すると「剰余の吸収」といっても未だ直接的である——「即自存在・すなわち可能性そのものと直接態」が「両者 beide」であるゆえん。別の例: 'Doktor beider Rechte' 「(国法および教会法の) 両法法学博士」——。そこで「この定立された存在を揚棄する運動」に言及し⁽⁶⁾、それを「ないしは直接態および即自存在を定立する運動である」と換言するのである。

『論考』でも、前文で「本質的な、また偶然的な諸特徴をもつ」とされた「命題」が、ここではその「本質的なもの」において把握されている。つまりいま「定立された存在」(本質的な特徴と偶然的な特徴の両者)が揚棄されて、「この媒介する運動〔命題〕は、直接態および即自存在を定立する運動である」という把握である。というのは——、「同じ意義を表現することができるすべての命題」(SはPである・SはQである・…)は互いに言い換えることができ、区別される「P(であるS)」・「Q(であるS)」・…は「直接態」(区別態)⁽⁷⁾である。そして「すべての命題」に「共通なもの」(S)は「即自存在」(「すべての命題」への「可能性」)である。かくして「この媒介する運動は、直

接態 [P・Q・…] および即自存在 [S] を定立する運動である」。先に「両者」とされたものが、ここでは命題における不可分の両項である。

さて命題「S は P である」において「S」が「即自存在」（可能性）であるなら、「P」は「シンボル」である。「シンボル」はそれによって象徴されるものを象徴し、逆に象徴されるものはシンボルによって象徴される「可能性」だからである。そして上に述べたことと「まさに同じ点において *sowie eben darin*」——『大論理学』'*sowie eben*'と『論考』'*ebenso*'の対応——、「同じ目的を果たすことのできるすべての [区別される] シンボル」(P・Q・…) はそれらが「共通にもっているもの」（即自存在 S）の「直接態」である。つまり「P」の「到達点 [目的] *Ende*」である「P である S」が「S」を象徴するのである——'*Ende*'は'*Zweck*'の類語——。そして「P である S」は「S は P である」の「定立された存在としての規定」であるから⁽⁸⁾、「この媒介する運動は、まさにこの点においてこの揚棄する運動を定立された存在として規定する運動である」。

このように「本質的なもの」（即自存在）が「定立された存在」（P である S）として規定される、換言して $S \supset P$ であるから、いま「この媒介する運動 [命題] は必然性である」。

「第3回講義」である。前文は *le hareng*（即自存在・すなわち可能性そのもの）と剰余の吸収（直接態）と、「両者は同じ仕方で定立された存在である」と説いた。ここで「帯気音 *h*」に言及するのは、それが「書」によって媒介されていることへの注目である。つまり「この媒介する運動は、この定立された存在を揚棄する運動ないしは直接態および即自存在を定立する運動である」、という次第。まずは『講義』の叙述を一部再掲しよう。

現在は、この公式は意味うつろである；帯気音の *h* なるものは、もう存在しないのだ；もっともこの名称が、ある音ではなくて、その前ではリエゾンも除音も行なわない、ということの意味するとすれば別であるが *à moins qu'on n'appelle de ce nom cette chose qui n'est pas un son, mais devant laquelle on ne fait ni liaison ni élision*。それゆえそれは循環論であって、*h* は書に由来する作りごとの存在にすぎないのだ。(p.47)

「帯気音の *h* なるものは、もう存在しない」。そこで第一に、「帯気音の *h* の前では、リエゾンと除音は行なわれない」と言えば、それは「意味うつろ *vide de sens*」である。第二にこれを言い換え — 「…とすれば別である *à moins que ne + subj.*」 —、「この名称が、ある音ではなくて、その前ではリエゾンも除音も行なわれない」と言えば、「帯気音の *h*」は「名称 *nom*」である。第一の場合であれ第二の場合であれ、「帯気音の *h*」は実質を欠く「呼称」である。「[帯気音] *h* は書に由来する作りごとの存在 [書による表現] にすぎない」とはこのことである — 以下では第一の場合を「帯気音 *h* (意味うつろ)」、第二の場合を「帯気音 *h* (名称)」と区別する —。そこで『資本論』に準えて次が言える:「作ることの書 [による] 表現は帯気音 *h* (意味うつろ)、言い換えれば帯気音 *h* (名称) である」。言い換えられる二つの命題は「同じ意義を表現することができる二つの命題」であり、「帯気音 *h* (意味うつろ)」と「帯気音 *h* (名称)」は「シンボル」である。両シンボルが「共通にもっているもの」は「作ることの書表現」(存在しない帯気音 *h*) であるから、『論考』に即して説いたと同じく「本質的なもの」が「定立された存在」として規定され、いま「この媒介する運動 [命題「作ることの書表現は帯気音 *h* (意味うつろ)、言い換えれば帯気音 *h* (名称) である]」は必然性である」。

以上の三テキストで前文との繋がりを示す語は 'so'・'ainsi'・'also' であり、『資本論』においても 'aber' は逆接でなく話題の継続を表わすと解される。ここでも「本質的なもの」が「定立された存在」として規定され、「この媒介する運動は必然性である」という論理だからである。

さて商品生産においては、「使用価値は、一般に、それらがただ交換価値の物質的基体、その担い手であるがゆえに、またその限りでのみ、生産される」(1 パラグラフ) が、その「商品世界の価値表現」(p.120) は金による表現である。「金表現」は例えば 2 オンスの金のように「金分量」(p.165) で示され、その重量を表わす「貨幣名 *Geldname*」(p.169) が「30 シリング」等である。貨幣名は「金の度量基準の法律的に有効な計算名」(p.171) なので、「30 シリング」や「1 ポンド・スターリング 10 シリング」など複数の「呼称 *Name*」(p.166) をもつ。そこで「5 労働日」 — すなわち労働力商品の 5 日分 — も金で表現され、「5 労働日の金表現は 30 シリング、言い換えれば 1 ポンド・ス

なぜ『資本論』は『大論理学』のように見えるのか？

ターリング 10 シリングである」。ここでは「同じ意義を表現することができる二つの命題」が「言い換えれば」で結ばれ、「30 シリング」と「1 ポンド・スターリング 10 シリング」は「シンボル」である。両シンボルが「共通にもっているもの」は「5 労働日の金表現」であるから、ここでも「本質的なもの」が「定立された存在」として規定され、いま「この媒介する運動 [命題「5 労働日の金表現は 30 シリング、言い換えれば 1 ポンド・スターリング 10 シリングである」] は必然性である」。

(8)

<大> C 絶対的必然性 5 パラグラフ 第 7 文

それだから必然性は自己を偶然性として規定するその当のものである — [すなわち] 自分の存在において自己から自己をつきはなし、このつきはなす運動そのものにおいてもっぱら自己へと還帰しており、そして自分の存在としてのこの復帰において自己から自己をつきはなした [その当のものである]。Sie ist daher *es selbst*, welche sich als *Zufälligkeit* bestimmt, — in ihrem Sein sich von sich abstößt, in diesem Abstoßen selbst nur in sich zurückgekehrt ist und in dieser Rückkehr als ihrem Sein sich von sich selbst abgestoßen hat.

<資> 24 パラグラフ 第 7 文

したがってこれが 20 ポンドの糸の価格である。Dieß also der Preis der 20 ℥ Garn.

<第 3 回講義> 1910 年 12 月 9 日

フランス語には一度も *h* をもったことのない語が相当数ある。Il y a en français un certain nombre de mots qui n'ont jamais eu d'*h*.

<論考> 3-3411

それゆえ人は次のように言うことができる Man könnte also sagen : 固有

名は対象を指示するすべてのシンボルが共通にもっているものである。Der eigentliche Name ist das, was alle Symbole, die den Gegenstand bezeichnen, gemeinsam haben. 名にとってはいかなる構成も本質的でないことがここから明らかになる。Es würde sich so successive ergeben, daß keinerlei Zusammensetzung für den Namen wesentlich ist.

いま「媒介する運動」——「第3回講義」に即して「作ることの書表現は帯気音 *h* (意味うつろ)、言い換えれば帯気音 *h* (名称) である」、『資本論』に即して「5 労働日の金表現は 30 シリング、言い換えれば 1 ポンド・スターリング 10 シリングである」——は「必然性」であり、すると「必然性は自己を偶然性として規定するその当のものである」。いずれの命題においても、シンボルは「直接態」(外面態) だからである。

以下、『大論理学』『論考』の具体例として「第3回講義」を読む。「フランス語には一度も *h* [音] をもったことのない語が相当数ある」、例えば *ome* である。現在の表記が *homme* であるのは「ラテン形態の名残りを留めて」のことであり、発音は[om]のままだから *h* は「無音の *h*」(*h muet*) である。「無音の *h*」は「一度も *h* [音] をもったことがない語」にとっての「必然性」であり、また当該語の固有性 *Eigenschaft* として「固有名」である。この「無音の *h*」に対して「帯気音 *h*」は「有音の *h*」とも呼ばれるが、しかし現在は「呼称」にすぎない。現代フランス語では「有音の *h*」を含めて「*h* はすべて発音しない」(仏和辞典『Jeunesse』)・つまり無音である。「固有名 [無音の *h*] は対象 [フランス語の *h*] を指示するすべてのシンボル [無音の *h*・有音の *h*] が共通にもっているものである」。

そこで次が謂える：「無音の *h*」は「[無音という] 自分の存在において自己 [帯気音 *h* (意味うつろ)] から自己 [帯気音 *h* (名称)] をつきはなし——すなわち「言い換え」——、このつきはなす運動そのものにおいて——いずれの「帯気音 *h*」も「呼称」にすぎないのだから——もっぱら自己 [無音の *h*] へと還帰しており、そして [無音なる] 自分の存在としてのこの復帰において自己 [音の実質] から自己 [シンボル] をつきはなししている」。ゆえに「[固有の] 名にとっては [それは例えば「帯気音 *h* (意味うつろ)」と「帯気音 *h* (名称)」から成るとい

うような] いかなる構成も本質的ではない)。

『資本論』で「これ」とは「5 労働日の金表現」であるところの「30 シリング、言い換えれば 1 ポンド・スターリング 10 シリング」である。そして「商品の [金] 価格」とは「金による一商品の価値表現 — x 量の商品 = y 量の貨幣商品」(p.161) である。例えば「1 トンの鉄 = 2 オンスの金」がそれだが、「価格は貨幣名で表現される」(p.171) からイギリスでは「これ [30 シリング、言い換えれば 1 ポンド・スターリング 10 シリング] が 20 ポンドの糸の価格である」。そして「価値が、商品世界の多種多様な物体から区別されて、この没概念的で物的な、しかしまた、まさしく社会的な形態にいたるまで発展し続けるということは、必然的である」(p.171) と説かれるように、「価格」は「必然性」である。また「鑄貨機能においては、金属貨幣に代わって他の材料からなる標章または象徴が登場する可能性を、貨幣通流は潜在的に含んでいる」(p.212)。そして「対象 [一商品の価値] を指示するすべてのシンボル [貨幣名] が共通にもっているもの」が「固有名」なのだから、「価格」は「固有名」である。

そこで次が謂える：「価格」は「[金による一商品の価値表現という] 自分の存在において自己 [30 シリング] から自己 [1 ポンド・スターリング 10 シリング] をつきはなし、このつきはなす運動そのものにおいて — いずれも「呼称」にすぎないのだから — もっぱら自己 [価格] へと還帰しており、そして [金による一商品の価値表現という] 自分の存在としてのこの復帰において自己 [価値の実質] から自己 [章標 (シンボル)] をつきはなしている」 — 'Zeichen'は'Symbol'の類語 — 。ゆえに「[固有の] 名にとっては [例えば「30 シリング」と「1 ポンド・スターリング 10 シリング」から成るといふような] いかなる構成も本質的ではない)。

或るテキストにその論理を把握することは容易でない。しかしテキストの論理を把握することなく著者を追思考することはできない。「論理的構文論」は、各テキストの「意味」をひとまず措いて論理に向き合うための方法である。論理の通底と聞いて、「人間誰しも同じようなことを考える。論理的同一は偶然にすぎない」、こう説く向きもある。けれども「同じようなことを考え

る」のは、論理が「人間にとって自然的なもの」・「人間固有の本性そのもの」だからであり、しかも「必然性は自己を偶然性として規定するその当のもの」である。論者たちに欠けているのは、「理性は、否定的かつ弁証法的であり、また肯定的である」という理解だろう。そして「 $p \supset q$ なら、 q が p から帰結する」と説く論理的構文論は明らかにそうした理解である。

【付録】の注

- (1) ラッセルは次のように述べている：排中律に従えば、命題「現在のフランス王は禿げである」か「現在のフランス王は禿げでない」か、いずれかが真である。しかしわれわれが禿げのもの・禿げでないものを列挙しても、どちらのリストにも現在のフランス王は見出されない。総合 *synthesis* を愛するヘーゲル主義者であれば、彼は鬘をつけているのだと結論づけるだろう。（『*Logic and Knowledge*' p.48）
- (2) 原要素/A/を前母音[a]と後母音の[a]に区別して発音することは、パリやその周辺部ではまだ行なわれているが、現在では多くのフランス人はこの区別をせず、すべてを[a]で発音する傾向が著しい。（仏和辞典『*Jeunesse*』）
- (3) 「第3回講義」と『講義』に共通する「自己を顕現する *se manifester*」だが——独語では'*sich manifestieren*'——、『大論理学』に次の例がある。

<大> 現実的なものは自己を顕現する。すなわち現実的なものはその外面態においてそれ自身であり、しかも外面態においてのみ、すなわち自己から自己を区別しかつ自己を規定する運動としてのみ、それ自身である。*es manifestiert sich, d.h. es ist in seiner Äußerlichkeit es selbst und ist nur in ihr; nämlich nur als sich von sich unterscheidende und bestimmende Bewegung, es selbst.* (WdL II S.201)

- (4) 「フランス語では母音連続も不可能ではないが、一方ではそれを避けようとする傾向があり」（仏和辞典『*Jeunesse*』）、また除音にも「母音接続を避けて<子・母一子・母>の音節構成にする働きがある」（同）
- (5) 「一定の、経験的に確定される分量の生産物は、いまや、一定分量の労働、一定量の凝固した労働時間を表わすだけである。それらは、社会的労働の一時間、二時間、一日分などの物質化でしかない。」（16 パラグラフ）
- (6) 「定立された存在」について寺沢注は次を説く。

「定立された存在」(*Gesetzsein*) は一方では、「……存在」(*-sein*) ということによって、直接態であることを意味している。だが他方では、「定立された……」(*Gesetzt-*) ということによって、定立する運動（作用）によって媒介されていることを意味する。……背後に運動（働き・作用）をもっており、これによって

なぜ『資本論』は『大論理学』のように見えるのか？

媒介されていまや直接的に存在しているそのような存在が「定立された存在」なのである。したがってこの用語は、或る場合には「媒介されていること」を強調する意味で、また或る場合には「直接的であること」を強調する意味で使われるが、しかしいずれの場合にも、他の一面から切りはなせないということが含まれている。「媒介された直接的なもの」という矛盾をはらんだ在り方を示すのが「定立された存在」という用語である。(以文社版『大論理学』2 p.291 訳者注 33)

- (7) 『「区別態」とは、自己自身から区別されている状態・すなわち自己自身とは異なったもの(自己自身ではないもの)になっている状態のことである。』(以文社版『大論理学』2 p.316 訳者注 53) すなわち「自己自身[同じ意義]から区別されている」、それが「区別態」である。
- (8) 「目的は手段において到達されているのだという、また充実された目的のうちには手段と媒介が保存されているのだというこの反省が外的な目的関係の最後の成果である。……最後に考察された第三の推理は、それが第一に先行する[両]推理の主観的な目的活動であるが、しかし外的客観性の・またそれとともに外面態一般の自己自身による揚棄でもあり、したがって先行する[両]推理の定立された存在における総体性である。」(WdL II S.461)

テキスト：

Hegel, G.W.F., *Wissenschaft der Logik I・II*. Suhrkamp. (寺沢恒信訳『大論理学』1～3 以文社)

Marx, K., *Das Kapital*. Diez. (資本論翻訳委員会訳『資本論』全13分冊 新日本出版社)

Saussure, F. de, *Troisième Cours de linguistique générale* (1910-1911). Pergamon.

Wittgenstein, L., *Tractatus logico-philosophicus*. Suhrkamp.

テキスト以外の参考文献：

フレーゲ 黒田・野本編『フレーゲ著作集4』 勁草書房

Hegel, G.W.F., *Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften*. Suhrkamp. (真下信一訳『小論理学』 岩波書店)

川崎誠『「資本論」の論理をどう把握するか』(『理想』699号) 理想社

松本正夫『「存在」の論理学研究』改訂版 岩波書店

森重敏『日本文法通論』 風間書房

Russell, B., *Logic and Knowledge*. Routledge.

Saussure, F. de, *Cours de linguistique générale*. Payot. (小林英夫訳『一般言語学講義』 岩波書店)

渡邊二郎『英米哲学入門』 筑摩書房

渡辺実『国語構文論』 塙書房

Wittgenstein, L., *Notebooks 1914-1916*, 2nd ed. Basil Blackwell.

[テキスト・テキスト以外の参考文献とも、邦訳書を併記したものは引用に際してその訳文を借用した（ただし文字種は変えている）。引用頁数も『大論理学』を除き邦訳書のそれを記している。それ以外については拙訳を用いた。なお以文社版『大論理学』は初版の訳であり、本稿で第二版を引用する場合は拙訳を用いている。その関係で引用頁数は原書のそれを記した。]

[本稿は 2015 年度専修大学研究助成「個人研究」による研究成果の一部である。]